



Title	ハルハモンゴル語のピッチアクセント
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学学報. 1982, 56, p. 31-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80880
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハルハモンゴル語のピッチアクセント*

角 道 正 佳

Pitch Accent of Khalkha Mongolian

Masayoshi KAKUDO

The purpose of this paper is to describe the pitch accent of the word of Modern Khalkha Mongolian based on the pitch unit which is different neither from the syllable nor the mora. The rising and falling positions of pitch come on the pitch unit boundary. The last pitch unit is always low, and the first pitch unit is low when the word consists of more than two pitch units. All the other pitch units are high. The falling position of pitch may come on a syllable boundary for some speakers when the word contains long vowel or diphthong: pitch falls immediately after such vowels. The rising position of pitch comes on a syllable boundary when there is an emphatic accent: pitch rises immediately before the stressed syllable. Further study is necessary to describe the pitch patterns of compounds and longer string than word, i.e. phrase, clause, etc.

0. はじめに

本稿はモンゴル語の標準語とされているハルハ方言のピッチアクセントを、音節ともモーラとも違った単位（ピッチ単位）を認定することによって、記述しようとするものである。第1章で、これまでモンゴル語のアクセントはどのように説明されてきたかを概説し、第2章で、ピッチパタンの実態を述べ、ピッチ単位による分析を行う。そして第3章で、ピッチアクセントのゆれについて、六回発話による調査の結果及びその解釈を行う。オートセグメンタル・セオリーは、今のままの形では、モンゴル語のピッチパタンの記述に有効ではないと思われるので、敢えて分析を試みなかった。

1. アクセントに関する従来の説明

モンゴル語のアクセントは、弁別的ではないといわれているが、アクセントがどこにあるかに関しては学者によって意見が異なり、次のような立場がある。

- (1) a. アクセントは強勢で、常に第一音節にある。たとえば Надмид (1968: 41)によれば, téŋger, bátatgasan のように短母音だけから成る語はもちろん, ágaar のように長母音を含む語でも、第一音節に強勢がある。第一音節が長母音の náadam はもちろん第一音節に強勢がある。
- b. aと同様に、第一音節が常に強いという以外に、musical accentが最後の音節にあるという説明をするもの。
Владимирцов (1929: 7–8, 64–66), Sanzheyev (1973: 23)
- c. 長母音や二重母音があれば、最初の長母音や二重母音に強勢があり、長母音や二重母音がなければ、第一音節に強勢がある。Poppe (1951: 13), Hangin (1968: 22). この立場によると, agaar は agáar となる。
- d. 長母音や二重母音があれば、最初の長母音や二重母音に強勢がある。長母音や二重母音がなければ, iを除く第二音節に強勢がある。二音節語で第二音節が短いiの場合は、第一音節に強勢がある。単音節語はその母音に強勢がある。Stuart (1957: 69)
- e. アクセントは、高低アクセントの要素が多く、開音節語では後から二つめの音節にアクセントがあり、閉音節語では最後の音節にアクセントがある。竹内・出村 (1957: 18–20). アクセントは高低とも強弱とも述べていないけれども、萩原 (1975: 16) も同じ立場である。
- f. cの立場と基本的には同じであるけれども、例外を認めるもの。Vietze (1976: 13–14)
- g. アクセントの位置には規則性がない Бимбаев (1913).
- h. ブリヤート方言について、Poppe (1960: 19) は、cとは違った見方をしている。すなわち、長母音や二重母音を二つ以上含む語では、後から二つめの長母音や二重母音が強い。たとえば, dalaígaar に対して, dalaigáaraa のようになる。その他の点ではcと同じである。たとえば, xáda, xadaár. なお、Bosson (1962: 11) は、同じブリヤート方言についてcと同じ説明をしている。

これらのうちで、cが最も広くゆきわたっている見方であるように思われるが、どうしてこのように様々の見方が存在するのであろうか。aの立場は、第一音節は弱化しないというように言い換えることができるように思われる。弱化しないというのは、モンゴル語の7つの母音のどれ

もが、その位置に出現するという意味であり、あいまい母音にならないということである。すなわち、第一音節の母音を置き換えることによって、最小対立になっているような対を得ることができるということである。第二音節以下にも、あらゆる母音が起こりうるけれども、母音調和による交替形を数えなければ、短母音の対立は三つに減少する。すなわち $i/u \sim \bar{u}/a \sim o \sim e \sim \bar{o}$ 。tegger のようなことばでは、強勢は実際には第二音節にあるのが普通である²けれども、第一音節の母音の音価は依然として明確であるのに対し、第二音節の母音は、極めてあいまいに発音される。agaar について言うと、第一音節の母音の音価は、もちろんはっきりしているし、第二音節の母音も同様ははっきりしている。第二音節が弱化しないというところに焦点をあてれば、c の立場になるであろうと思われる。c の立場は、長母音や二重母音でも、語末に近いものはそうでないものと比べて、弱化の度合い（おそらく音価よりも音量のほうが影響を受けやすいものと思われる）が大きいということを示唆しているといえよう。しかし、実際には、必ずしもそうっていないことが、h からうかがわれる。d の後半の説明は、ピッチの上がりめを記述したものと解釈できる。Stuart の考えに従うと、araw, móri, móriŋ のようになる筈である。このうち araw, móri, については納得できるけれども、móriŋ についてはさらに考察を要する。e は、ピッチの下がりめを記述したものであると解釈できる。しかし、残念なことに、単語の例がすべて文語形に近い形で示されており、実際の発音とはかなりくい違うものがある。竹内・出村(1957: 18-20)の例を引用してみよう。³

(2) #C₀V'C₁V#

áma	口	éme	女	áxa	兄	éxe	母	tére	彼
súme	廟	xóni	羊	yíxe	大きい				

#C₀VC₁V'C#

orós	露西亜	ulús	国	xagás	半分
gajár	地, 場所	xabúr	春	ebúl	冬
bičík	書物	jirúk	絵	arál	島
šabár	泥	bulák	泉		

#C₀VC₁V'C₁V#

xebéli	腹	tamáxi	煙草	aráxi	酒
ümúdü	ズボン				

#C₀VC₁VC₁V'C#

čaxilgán	電気	Solongós	朝鮮	Enetxék	印度
tüşimél	役人	arsalán	獅子		

#C₀VC₁VC₁VC₁V'C#

amidurál	生活	yixetgesén	拡大した
----------	----	------------	------

「葉」ということばが例にあがっていないけれども、ém となるであろう。しかし、éme 「女」が開音節で、ém 「葉」が閉音節であるというのは文語に影響された表記であり、現代語では「女」と「葉」は同音異義語である。ulús 「国」は、úlsとも発音される。čaxilgán 「電気」以外には長母音を含んだことばが例にあがっておらず、このことばは、たまたま最後の母音が長母音であるので、長母音とアクセントの関係が、この説明でははっきりしない。ほぼ同じ立場の萩原(1975: 16)から引用してみよう。³

(3) #C ₀ V'C ₁ V#	éme	女	báGa	小さい
	GáHai	豚	ábu	父
#C ₀ VC ₁ V'C#	ebúl	冬	ulús	国
	Gažár	土地	bicik	本、書き物
#C ₀ VC ₁ V'C ₁ V#	aGúla	山	ečige	父
#C ₀ VC ₁ VC ₁ V'C#	žahidál	手紙	tüšimél	官吏

GáHai 「豚」は確かに母音で終わることばであるけれども、この見方に従うのであれば、むしろ GaHái のほうが正しいように思われる。aGúla 「山」に至っては、現代語の発音uulと著しくかけはなれており、このことばを三音節語とみなすことには、同意しかねる。この説明に用いられている語は、文語形に依ったものであり、やはり、現代語を記述する方法としては妥当ではないと思われる。

ピッチの下がり目を記述したと思われるものとしては、bのmusical accent もそうであるが、最後の音節にくるという点がeとは違い、しかも Sanzheyev (1973: 27) の説明によると、「特に、質問、疑い、勧誘、皮肉が表現されているか、あるいは、論理的アクセント（新情報を伝える要素と考えられる）がある場合に、breath-group の最後に起こる」となっているので、musical accent は terminal juncture の一種であると考えられる。

gについては、まず Бимбаев は長母音と短母音を区別していないことが多いという点に注意する必要がある⁴。長母音を含んだことばでは、通常そこにアクセントがあるというように記されている。一方、短母音しか含んでいないことばについては、開音節語の最終音節にアクセントが来ないという点を除くと、規則性は確かなになさそうである。興味深いのは、同じことばが意味によってアクセントが違うものがあることである。

(4) モンゴル語	ロシア語	ページ
Баяртый	Радужный	271
Баяртый	Радостно -ый	271
Тымдэгъ	Отметка	178

Тымдэгъ	Метка	130
Алимъ	Яблоко	413
Алимъ	Апельсинъ	2
Хобцасъ	Одежда.	164
Хобцасъ	Амупиция	2

Бимбаев のこの書物は、露蒙辞典であるから、実際にはロシア語のほうが先に出ている。また、モンゴル語の下線を引いた母音は、強勢を示している。こういった例から判断して、Бимбаев は、実際に聞こえたとおりに表記したのではないと思われる。この辞典は文字改革以前に出版されており、アクセント以外にも、表記の面で興味深いものを多く含んでいる。

2. モンゴル語のピッチパターン

モンゴル語のピッチは、いったいどういうふうになっているのであろうか。いくつかの単語を選び、そのピッチを表してみよう。ピッチがどこで上がり、どこで下がるかということは、大変むずかしい問題である。なめらかに自然に上がり、なめらかに自然に下がるというのが本当の姿であろう。しかし、ここでは敢えて、上がり下がりの位置を明確に表してみようと思う。上がりめと下がりめが音節の切れめではないという点が、非常に大切な点である。*をつけた形は、近畿地方出身の日本人学生がしがらな正しくない発音である⁵。

(5) ax	兄	axaa	自分の兄を	axaar	兄によって	axaaraa	自分の兄によって
						*axaa	raa
mor	馬	morij	馬				
saij	良い	saija	美しい				
		*saija					
jaagaa	なぜ	*jaagaa					
mongol	モンゴル	mongolij	モンゴルの				
*mongol		*mongolij					

ax「兄」、mori「馬」、saij「良い」のような比較的短かいことばは、最初が高く、最後が低く発音される。これに対し、比較的長いことば（残りのすべて）は、最初が低く、次に高くなり、最後がまた低く発音される。比較的短かいとか比較的長いとかいうあいまいな表現をしたのは、これらが音節数では区別できないからである。mori も morij も二音節であるのに、mori は高低と発音され、morij は低高低と発音される。「女」も「菓」も共に高低と発音される。すなわち、「女」

を二音節で発音しようが (eme), 一音節で発音しようが (em) 同じピッチパターンを成し, 「菓」を一音節で発音しようが (em), 出わたりの母音と付けて二音節で発音しようが (eme) 同じピッチパターンで発音される. このことだけから考えても, ピッチパターンは音節数とは無関係であることがわかる. saixaŋ 「美しい」は, sa¹ixaŋ と発音されるのが普通であり, sa¹ixaŋ と発音すると, ずいぶんモンゴル語らしくなくなる. 近畿地方出身の学生が, 後者のような発音をするのは, 彼らがこのモンゴル語の単語を低起式のことばとして受けとめているからであり, このことは saixaŋ が低く始まっていることを裏づけるものである. もし saixaŋ が高く始まっていたなら, 甲種アクセントの持主である彼らは, この単語を高起式で受けとめ, sa¹ixaŋ と発音するであろうと思われる. saixaŋ の実際の発音は, sa の途中からすでにピッチの上昇が始まっている. mori 「馬」についても, mo の部分でピッチが上昇しているが, この単語が低起式として受けとめられないのは, 低起式でしかも第一モーラの直後にアクセント核があることばが存在しないためである⁶.

比較的長いことばは, 低く始まり, すぐに高くなるという特徴がある. このことは saixaŋ ですでに述べたとおりであるが, axaaraa 「自分の兄によって」を見るとさらにはっきりする. すなわち, 低く始まり, すぐに高くなってずっと高いところが続き, 最後に低くなる. このパターンは一型アクセントを連想させるものがある. 甲種アクセントの話者が発音すると, ずっと低いところが続き, 1モーラだけ高くなってすぐに低くなる. 以上の説明からわかるように, 低く始まってすぐに高くなるという事実を, 最初の1モーラだけ低く, 次のモーラから高くなるというぐあいに表現したのが, (5)の表である. 上がる位置は, #C V_であり, _のあとには何が続けてもよい. (ただし長母音や二重母音はV Vと表わされるものとする.)

(6) #C ₀ V___C...	mo-riŋ	馬
#C ₀ V___CC...	mo-ŋgol	モンゴル
#C ₀ V___CCC...	bo-ldžmor	ひばり
#C ₀ V___V...	sa-ixaŋ	美しい
	ja-agaad	なぜ

次に, 下がる位置であるが, これはモーラの定義にもよるけれども, 語末から数えて1モーラ前というわけにはいかない. axa-a 「自分の兄を」, saixa-ŋ 「美しい」, mongo-l 「モンゴル」などは, 1モーラ前ともいえなくもないが, axa-ar 「兄によって」, jaaga-ad 「なぜ」を1モーラ前ということにすると, VVは2モーラであるが, VVCも2モーラであることになる. ところが, a-x 「兄」からわかるように, VCは2モーラでなければならないから, VVCは3モーラであると考えのほうが良いように思われる. そうすると, axa-a, saixa-ŋ, mongo-l, a-x では1モーラ前で下がり,

axa-a-r. jaaga-a-d では2モーラ前で下がるといわざるをえなくなる。2モーラ前で下がる場合は、下がりめの直後が、長母音、二重母音の第二要素である場合に限られているようであるから、そのことを明記すればよいわけであるけれども、もっと違った見方はできないであろうか。

モンゴル語では、音節のはじめに子音が並ぶことがないから、音節の切れめは、単語を前から順に見ていき CV の位置にあるということが出来る⁷。(5)で示した単語を音節に分けると、(7)のようになる。

(7)	ax	a-xaa	a-xaar	a-xaa-raa
	mo-ri	mo-riŋ		
	saiŋ	sai-xaŋ		
	jaa-gaad			
	moŋ-gol	moŋ-go-liiŋ		

一方、モーラに分けると(8)のようになる⁸。

(8)	a-x	a-xa-a	a-xa-a-r	a-xa-a-ra-a
	mo-ri	mo-ri-ŋ		
	sa-i-ŋ	sa-i-xa-ŋ		
	ja-a-ga-a-d			
	mo-ŋ-go-l	mo-ŋ-go-li-i-ŋ		

モーラの構成要素は、V, CV, Cであり、Vは語頭及びVのあと、Cは語末及びCの前の位置で単独で1モーラを形成する。さて、上がりめと下がりめに関係する切れめは、(9)のようになる。

(9)	a-x	a-xa-a	a-xa-ar	a-xa-ara-a
	mo-ri	mo-ri-ŋ		
	sa-iŋ	sa-ixa-ŋ		
	ja-aga-ad			
	mo-ŋgo-l	mo-ŋgo-li-iŋ		

語中に切れめが二つある場合、最初のものが上がりめに、最後のものが下がりめに対応する。語中に切れめが一つだけある場合は、下がりめに対応する。a-xa-ara-a, mo-ŋgo-li-iŋ は、語中に三ヵ所切れめがあるけれども、二つめの切れめは上がりめにも下がりめにも対応しない。この切れめは、a-xa-ar, mo-ŋgo-lとの平行性を保つために特に記してある。これらの切れめと切れめの断片を「ピッチ単位」と呼んでおこう。ピッチ単位の構成要素は、V, CV, C, VC, VCV,

CCVなどあって非常に複雑であるが、ピッチ単位の切れめを挿入する原理は大変簡単である。ピッチ単位の切れめは、規則(10)によって一義的に挿入される。

$$(10) \quad \emptyset \rightarrow - / \left\{ \begin{array}{c} \# \\ C \end{array} \right\} V ______$$

すなわち、単語を前から順に見ていき、CVの直後に切れめを挿入すればよいわけである。語頭子音がない場合を考慮して#Vの直後という指定も記しておいた。⁹

語中に音節の切れめを持たない語（単音節語）は存在するが、語中にピッチ単位の切れめを持たない語は存在しない。¹⁰ axは単音節語であるが、ピッチ単位としては二つである(a-x). bi「私」、ta「あなた」は実際には、bii, taaと発音されるから、単音節語ではあるがピッチ単位としてはそれぞれ bi-i, ta-aという二つの単位から構成されている。したがってどんな短い単語でも、最低ピッチ単位は2である。そしてこの場合、高低というピッチで発音される。ピッチ単位が3の単語は低高低と発音され、ピッチ単位が4の単語は低高高低と発音される。この関係を図示すると、(11)のようになる。

(11) * P

$\overline{P P}$	$\overline{ax}$	$\overline{mor }$	$\overline{sa }\eta$				
$\overline{P P P}$	$\overline{axaa}$	$\overline{axaar}$	$\overline{mor }\eta$	$\overline{mon }gol$	$\overline{sa }ixa\eta$	$\overline{jaagaad}$	
$\overline{P P P P}$	$\overline{axaaraa}$	$\overline{mon }gol }\eta$					

P: ピッチ単位

最後のPは必ず低く、最後から2つめのPは必ず高いという特徴がある。そしてピッチ単位が3以上のものは、最初のPが必ず低く、真中のPが高い。これを実現化規則で表わすと次のようになる。

- (12) (1) $P_i \rightarrow H_i$
 すべてのPをHとマークせよ。ただしH：高
- (2) $H \rightarrow L / ______ \#$
 最後のHをLに変えよ。ただしL：低
- (3) $H \rightarrow L / \# ______ H$
 Hの前にある最初のHをLに変えよ。

派生例

PP	PPP	PPPP	
HH	HHH	HHHH	(1)
HL	HHL	HHHL	(2)
	LHL	LHHL	(3)
HL	LHL	LHHL	

(11)の表に対応する表を、モーラによる分析で示すと(13)のようになる。

(13)	* M		
	<u>M</u> <u>M</u>	<u>ax</u>	<u>mo</u> <u>ri</u>
a	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>	<u>axaa</u>	<u>mo</u> <u>ri</u> <u>n</u>
b	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>	<u>sai</u> <u>n</u>	
a	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>	<u>mo</u> <u>ngol</u>	<u>sai</u> <u>xa</u> <u>n</u>
b	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>	<u>axaa</u> <u>r</u>	
a	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>	<u>surag</u> <u>tš</u> <u>id</u>	
b	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>	<u>jaaga</u> <u>ad</u>	
a	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>	<u>te</u> <u>mdegle</u> <u>x</u>	
b	<u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u> <u>M</u>	<u>mo</u> <u>ngol</u> <u>i</u> <u>n</u>	

M：モーラ

M1つだけから構成される単語がないのは、ピッチ単位(P)の場合と同じであるが、Mが3以上の単語は、ピッチの型が二種類あるという点、すなわち、最後から二つめが高いもの(a)と、最後から三つめが高いもの(b)とがあるという点が違う。大体においてb型は、最後の音節が長母音であるか二重母音であるといえるのであるが、困ったことに次のようなものがあることである。uls「国」は uls と uls (uls ~ uls) とも発音される。モーラで分析すると、どちらの場合も3モーラで構成されていることになるので、前者がb型、後者がa型となる。¹¹ このことは長母音や二重母音を含んでいないから、なぜb型の発音もありうるのかの説明ができないことになる。ピッチ単位を用いると、uls は PP、uls は PPP となるから、ピッチパタンの違いはピッチ単位の数の違いとして表わすことができる。ほかにもこういった例をあげると(14)のようなものがある。

(14) (i)	(ii)	
<u>V</u> <u>CC</u> (V)#	<u>V</u> <u>C</u> (V) <u>C</u> (V)#	~ <u>V</u> <u>C</u> (V) <u>C</u> (V)#
<u>P</u> <u>P</u>	<u>P</u> <u>P</u> <u>P</u>	~ <u>P</u> <u>P</u> <u>P</u>
bügd	büg(ü)d	すべて

töwd	töw(ö)d	中心に
alb(a)	al(a)b(a)	公務
gomb(o)	gomb(o)	ゴンボ (人名)
m'ang(a)	m'ang(a)	千
bagš(i)	bagš(i)	先生

これらの単語のうち, *bügd*, *töwd*, *alb(a)*などは, 母音が挿入されて, *bügüd*, *töwöd*, *alab(a)* のようにも発音されうるので, ピッチ単位が増えることになるが, *gomb(o)*, *m'ang(a)* のような homorganic な子音結合に母音が割り込むとは考えにくい. これがピッチ単位による分析の難点であるが, そこで次のような任意規則を設けることにしよう.¹²

$$(15) \quad V - CC(V)\# \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} V - C - C(V)\# \\ V \quad C - C(V)\# \end{array} \right\} \quad (\text{任意的})$$

この規則がどういう条件で適用されるかは, 今のところはっきりはわからないが, 文語形で VCVC(V)# という音節構造を持っていることばは, この規則の適用を受けやすいという傾向があるようである. たとえば「チベット」は文語形で *töbed* という形であるが,¹³ このことばを(14)の(ii)型の発音ですと, 「中心に」(文語形で *töb dü*)と区別できることになる. しかし, 文語形で VCVC(V)# という形を持っていない *alb(a)*(文語形で *alba*), *gomb(o)*(文語形で *γombo*) のようなことばでも, (13)の(ii)型の発音になりうるし, しかも *bagš* のように *g* が無声化しままで *bagš̥ ~ bagš̥* と発音されるものがあるので, 文語における音節構造は決めてにはなりえない. 「権利」*erx̥ ~ erx̥ ~ erx̥*(文語形 *erke*)と「探す」*erex̥*(文語形 *erikü*)を比較すると, 文語形において VCC(V)のものは(i)型と(ii)型の発音があり, 文語形において VCVC(V)のものは, (ii)型の発音をするといえるように思われるかもしれないけれども, 「取る」*jawax̥*(文語形 *abqu*)と「行く」*jawax̥*(文語形 *yabuqu*)とを比べてみると, 必ずしもそうなっていないことがわかる. *guix*「頼む」(*γuyuqu*)は *guix̥*と発音され, *güix*「走る」(*güyüku*)も *güix̥*と発音される. 一方 *sain*「良い」(*sayin*)は, *sain̥*とはなりえない.¹⁴ *ail*「アイル」, *aaw*「父」は, *ail̥*, *aaw̥* 以外に *ail̥̥*, *aaw̥̥* とも発音されうるので, 規則(15)とは別に, 規則(16)が必要になる.

$$(16) \quad V \cdot VC\# \rightarrow V \cdot V \cdot C\# \quad (\text{任意的})$$

規則(15)と違うのは, 第一音節が長母音や二重母音の場合は, わりあいにはっきりピッチの上昇が感じられるので, →の右側に VV-C# という形がないことである. やはり, どういう条件でこの規則が適用されるのかはよくわからない. *baɣar*「喜び」との区別をきわだたせるために, *baɣir*「場所」が *baɣir̥* とはなりにくいというような傾向はありそうである. 同様に, *ör*「ほかの」に対して, *örwör*「壊」. *örwör* と *ör* の区別は *w* の有無というよりは, ピッチパタンの違いによるもののほう

が大きいように思われる。

以上述べたのは、いわゆる無標のピッチパターンであるが、第3章で示すように、単独で発音した場合、長母音や二重母音を含んでいることばについては、最初の長母音や二重母音の直後の音節境界でピッチが下がるという発音がむしろ無標の型になっているという話者もいる。この場合、強勢が(1)cの型に従い、強勢のある位置にピッチの最高部がきれいに一致したものと考えられる。naadam「ナーダム」が、naadam ではなく naadam となるし、önödör「きょう」、temeegeer「ラクダによって」がそれぞれ、önödör, temeegeer となるので、ピッチの上がりめは、ピッチ単位の切れめ ((6)を参照) に一致し、ピッチの下がりめは、強勢のある音節の直後にあることになる。しかし、xöröng(ö)「資本」は、xöröng(ö) とはならず、xöröng(ö) ~ xöröng(ö) となるから、強勢の位置が完全に(1)cに従っているわけではない。すなわち、

- (1) i. 長母音や二重母音があれば、最初の長母音や二重母音に強勢があり、長母音や二重母音がなければ、閉音節語では最後の音節、開音節語では最後から二番めの音節に強勢があるかあるいは、第一音節に強勢がある。¹⁵

ピッチパターンに関しては、次のようになっていると思われる。

- (17) 語頭、語中の長母音、二重母音に強勢がある場合、ピッチの上がりめは、最初のピッチ単位の直後にあり、ピッチの下がりめは、強勢のある音節の直後の音節境界にある。それ以外の場合、ピッチパターンは、(11)に従う。すなわち、tenee「ラクダ」は、temee ではなく、temee となる。

(17)において、「それ以外の場合」には、長母音や二重母音を含まないことばも該当する。

強調の強勢がある場合には、ピッチの上がりめも音節境界に一致しうる。たとえば、baidžee「であった」。このことから、音節はモンゴル語においては強勢に関与的な単位であると考えられる。

(11)だけでは説明できないものとして、次に複合語について考察してみよう。「ウランバートル」は、ulaambaatar と ulaambaatar と ulaambaatar とも発音される。同様に、möngxibilig(人名)は、möngxibilig よりむしろ möngxibilig あるいは möngxibilig のように発音される。adž axui「経済」や uls tör「政治」は、わかち書きをするけれども、一語のように発音される。すなわち、adž axuiuls tör と adž axuiuls tör と発音される。「アルファベット」は、tsagaan tolgoi あるいは tsagaan tolgoi と発音されるから、すべての複合語が一語のように発音されるわけではない。一語のように発音されるという表現は正確ではないけれども、ピッチの山が一ヵ所しかできないというほどの意味である。しかし、šireendeer「机の上に」のようなものもあるので、この言い方も正確ではない。ピッチの山が一ヵ所だけできる範囲を「ピッチアクセント句」と呼ぶことにす

ると、「ピッチアクセント句は、母音調和の及ぶ領域よりも大きいけれども、語境界よりも小さい場合がある。複合語の場合についていえば、最初の語彙要素の長さに関係しているように思われる。この関係を図示すると、次のようになるであろう。

(18)	<u>uls</u> tōr	tsaga <u>an</u> to gqi
母音調和の及ぶ領域	└───┘	└──────────┘
ピッチアクセント句	└───┘	└──────────┘
語の領域	└───┘	└──────────┘

複合語については、まだ不明の点が多いので、今はこれ以上は追求しないことにする。¹⁶

bas l, mön l のようなことばは、l が成節子音として発音されれば、bas l, mön l のようにもなりうるが、通常 bas l, mön l のように発音される。これは、sireen deer「机の上に」と同じように、ピッチアクセント句が全体で一つである例である。¹⁷

文中では、(11)の最後のPが低くならなかったり、下がりめが遅れるものがある。後者の例としては、ond「年に」、soroogooo「泥によって」のような例があげられるであろう。ピッチ単位は、音節ともモーラとも違うことは、すでに述べたとおりであるが、これら三つの単位はどういう関係になっているのであろうか。ピッチ単位とモーラの関係は、比較的簡単である。すなわち、ピッチ単位の切れめは必ずモーラの切れめに一致している。しかし逆は真ではない。(8)と(9)とを比べるとわかるように、axaar「兄によって」は、モーラに分けると、a-xa-a-r、ピッチ単位に分けると、a-xa-ar であるから、r の前にあるモーラの切れめに対応するピッチ単位の切れめは存在しない。ar がピッチ単位では一つの単位を成すからこそ、うしろから二つめのPが常に高いということがいえるのである。a-xa-ara-a「自分の兄によって」の ara のように、直観的には意味を成しがたいような音連鎖が一つの単位になっているのは、ピッチの下がりめを、単語のうしろから規定することが大変困難だからである。すなわち、ピッチの上がりめを表わす(6)のような表に対して、ピッチの下がりめを表わすような表を書くことが困難だからである。しかし、(10)によって単語を前から後の方向に切断していくと、ピッチの下がりめはうまく規定できることになる。

3. 六回発話によるモンゴル語のピッチパターン¹⁸

2章の(11)で示されているパターンは、無標のパターンであった。ax とか mori とか morin のようなことばは、何度発音してもらっても、誰が発音しても、ピッチが下がる位置に大きな変化はない。uls とか ail など、これに対して、少なくとも二通りの発音がある。(15)、(16)の規則がそのことを示している。長母音や二重母音を含んだことばでは、発音に個人差がありそうである。この実態を調べるために、六回発話による調査を試みた。六回発話というのは、同じ単語が六回、違っ

た順序で出てくるように配列したものを、何人かの人に読んでもらい、同じ単語にどれぐらいの発音上のバリエーションがあるかを知るための一つの手段である。用意した単語は42個あり、これを21個ずつの二つのグループ(1～6及び7～12)に分けて、次のように配列した。1には、21個のそれぞれ異なる単語をランダムに配列し、2には、同じ21個の単語を違ったふうにランダムに配列する。これを6通り行う。ある単語は1から6までのどのグループにも一回だけ現れる。しかもその現われ方は6回とも違っている。同じようにして残りの21個の単語を、7から12までのグループにランダムに配列する。こうして、ひとりがのべ252語を発音することになる。同じことを何人かの人にやってもらったのであるが、ここではその中から三人を選び、各個人がどの単語を、どのようなバリエーションで、何回発音したかを示してみようと思う。どの発音が何番めに出てきたかはさほど重要ではないと思われるので、発音した順序は示さない。(19)は用意した42個の単語を示している。(20)の表においてハイフンは、ピッチの下がりめの位置を表わしている。

(19)	aaw	surguul'aasaa
	bügd	tegeed 1
	jaagaad	jawtsagaagarai
	önöödör	adžiltaj
	ail	xen 1
	gombo	temdegleegüi
	naadam	giigüülegtš
	erex	ojuutaj
	m'ajga	sexeetaj
	xöröggö	ulaanbaatar
	bagš	amdžaagüi
	alba	temeegeer
	erx	temeegeeree
	töwd	ortšuulaarai
	aimag	daraagaar
	aŋgi	xüleegeerei
	uudam	uitaj
	guix	am'taj
	siireg	šoroogoor
	uls	mön 1
	üil	bas 1

(20)	I	II	III
u-ls	6	6	6
bü-gd	1		
büg-d	5	6	6
bag-š	6	6	6
tö-wd	5	5	1
töw-d	1	1	5
aŋ-gi	6	6	6
go-mbo	3		
gom-bo	3	6	6
m'a-ŋga	2		
m'aŋ-ga	4	6	6
al-ba	6	6	5
alba			1
er-x	6	6	6
ere-x	6	6	6
a-aw	6	1	4
aa-w		5	2
a-il	1		
ai-l	5	6	6
üi-l	6	6	6
gü-ix	1		
güi-x	5	6	6
xöröŋ-gö	6	6	
xörö-ŋgö			5
xöröŋgö			1
naa-dam	6		
naada-m		6	5
naadam			1
ai-mag	6		
aima-g		6	6
uu-dam	6		
uuda-m		6	5
uudam			1
sii-reg	6		
siire-g		6	6
önöö-dör	6		
önöödö-r		6	6
jaa-gaad	6		
jaaga-ad		6	6
temee--geer	6	3	
temeege-er		3	5
temeegeer			1

temee-geeree	6	3	2
temeegeere-e		3	4
šoroo-goor	6	3	
šoroogo-or		3	5
šoroogoo-r			1
daraa-gaar	6	3	
daraaga-ar		3	6
surguu-l'aasaa	6	5	3
surguul'aa-saa			2
surguul'aasa-a		1	1
temdeg-leegüi	2		
temdeglee-güi	4	4	2
temdeglee-gü-i		2	3
temdeglee-güi			1
amdžaa-güi	6	4	
amdžaagü-i		2	6
jawtsgaa-gaarai	6	5	6
jawtsgaagara-i		1	
ortšuu-laarai	6	4	5
ortšuulaara-i		2	1
xülee-geerei	6	5	
xüleegeere-i		1	6
ojuu-taḡ	6	5	2
ojuuta-ḡ		1	3
ojuutaḡ			1
sexee-teḡ	6	3	
sexee-te-ḡ		3	6
ui-taḡ	6	6	
uita-ḡ			5
uitaḡ			1
am'ta-ḡ	6	6	4
am'taḡ →			1
am'taḡ ↗			1
adžil-taḡ	1		1
adžilta-ḡ	5	6	5
gii-güülegtš	6		
giigüüle-gtš		6	6
ulaan-baatar	6	5	
ulaanbaata-r		1	6
bas-l	6	6	6
mön-l	6	6	6
xen-l	6	6	6

この調査から次のことがいえる.

VCC(V)# 及びVVC(V)#型

1. 全員が六回共一致しているものは次のとおりである.

u-ls, aŋ-gi, er-x, üi-l,

2. PPよりもPPPのほうが一般的だと思われる単語は次のとおりである。

büg-d, gom-b(o), máŋ-g(a), al-b(a), ai-l,gui-x

3. töwd は、被験者Ⅰ,Ⅱでは、tö-wd被験者Ⅲでは、töw-dのほうが多く現われた。

4. aaw については、a-aw ~ aa-w のうち、どちらが無標かこのデータからは決めがたい。

長母音、二重母音を含む語については、個人別に見たほうが、傾向がはっきりするようである。被験者Ⅰは、最初の長母音もしくは二重母音の直後でピッチが下がる傾向がある。たとえば、naa-dam, sii-reg, önöö-dör, jaa-gaad, temee-geer, daraa-gaar, gii-guulegtšなどを六回共この発音でしている。下がりめは、ulaam-baatarのような複合語を除くと、長母音または二重母音の直後にあるが、temdeglee-güiに対して、temdeg-leegüiという発音が二回見られるし、また xörön-göを xörö-ŋgöではなく xöröŋ-göと六回とも発音していることを考えると、音節の切れめで下がっているとすべきなのかもしれない。この被験者は、aadarを単独ではaa-darと発音するけれども、borooが続くと、aada-rと発音する。これは、(11)の発音が無標の発音であることを示しているといえよう。

被験者Ⅱは、被験者Ⅰほど極端ではないが、やはり、最初の長母音または二重母音の直後でピッチが下がるというバリエーションを持っている。たとえば、temee-geeree, temdeglee-güi, surguu-l'aasaaという発音が、無標の temeegeere-e, temdegleegü-i, surguul'aasa-aと共に現れる。被験者Ⅱの特徴は、長母音や二重母音を三つ以上含みである単語については、最後のPの前で下がるという無標の型と、最初の長母音または二重母音の直後で下がるという二つの型を持っていることである。surguul'aasa-a ~ surguu-l'aasaa, jawtsgaagaara-i ~ jawtsgaa-gaarai, xüleegeere-i ~ xülee-geerei.

被験者Ⅲは、被験者Ⅱと同じ特徴を持つ以外に一語ではあるけれども、surguul'aa-saaという二つめの長母音の直後で下がる発音を六回のうち二回している。さらにこの人の特徴として、temeege-r, šoroogoo-rという発音がある。これらの無標の型は、temeege-er, šoroogo-orであるから、下がりめが遅れていることになる。am'taŋの最後を下げない発音や、最後を上げた発音が見られることから判断して、文中でポーズの前で起こりうるような発音が散発的に現れたものと解釈できる。

注

* 本稿は1978年秋、京都で開かれた日本モンゴル学会で口述発表したものに加筆したものである。すぐ次の日本モンゴル学会で城生佰太郎、三上司両氏による、オートセグメンタル・セオリーによる再分析が発表された。筆者は残念なことにこの発表を聞くことができなかったのであるが、hand outを手に入れることができた。それによると、筆者がもっとも重要だと考えていること、すなわち、ピッチの上がりめや下がりめは音節の切れめとは違う位置にあるということが全く配慮されていない。オートセグメンタル・セオリーによる分析が有効に機能するためには、association lineを母音とだけ結ぶやり方ではなく、ある場合には子音とも結ばなければならない。筆者は、ピッチを担うのは母音ではなく、ピッチ単位であることを主張しているのである。とくにオートセグメンタル・セオリーによる記述は必要でないと思われるので、口述発表の時の分析をここに示

すことにする。ただし、一部考え方が変わったところもあるので、口述発表の時のままではない。またいわゆる有標のビッチボタンについても、若干の調査の結果を示したいと思う。

1. 現代モンゴル語の表記は、フィノウグロ協会の表記法を原則として使用するが、長母音は、母音を二つ並べる方法で表わしてある。補助記号は省略した。u, öはそれぞれu, öによって表わした。IPAと違うのは次のものである。

	IPA
š	ʃ
dʒ	dʒ
tʃ	tʃ
b'	b _j

2. tegger をふつうに発音すると、物理的には、第一音節のほうが強いこともあるし、第二音節のほうが強いこともある。また、第一音節と第二音節がほぼ同じ強さで発音されることもある。第二音節が第一音節と同じ程度か、少し弱い程度なら、心理的には、第二音節に強勢があるように聞こえる。第一音節に強勢があるように聞こえるためには、はるかに第一音節のほうを強く発音しなければならないが、そういった発音はモンゴル語として不自然である。また、第二音節のほうを、はるかに強く発音すると、もちろんそこに強勢があるように聞こえるが、この発音もモンゴル語としては不自然である。
3. 文語の表記法のうちでもっとも広く用いられているものと、竹内・出村及び萩原の違いは次のようになっている。

	竹内・出村	萩原
q [q]	x	h
k [k]	x	h
γ [G~K]	g	G
g [g]	g	g
	k(語末)	k(語末)
č [tʃ]	č	c
j [dʒ]	j	ž

竹内・出村の大文字は、固有名詞を表わしている。アクセントの表記は、実際には、竹内・出村では母音の直前に'が付いているし、一方萩原では母音の直後に'が付いているのであるが、混乱を避けるために、母音の上に記すことにした。

4. 334ページのставить на столъの項に ширэнъ дээръ табихоとあるが、このдээръは長母音を記したものである。しかし、133ページのНадьの項にはДэръとあるから、長母音の表記には一貫性がなく、ごく少数の例にその表記が見られるにすぎない。340ページのСтроитьの項にあるБагцоулохのou(実際はuu)も長母音を表記したものである。長母音を二つ以上含むことばは、アクセントは一カ所しか記されていないのがふつうである(116ページ Озарать Гигулаху) けれども短母音しか含んでいないことばが、二つのアクセントを持っているように記されているものもある。たとえば、2ページのАнализироватьの項のДлгабарьлахо。
5. 甲種アクセントでない地方の出身者まで、近畿地方出身者の多い中で影響されて同じように正しくない発音をすることがある。
6. この点は、乙種アクセントに属する標準語においても、同じことがいえる。すなわち第一モーラの直後にアクセント核があることばは、高く始まる。
7. 語頭で子音が続かないからといって、語中でも音節の初めに子音が続かないということはいえないけれども、そう考えたほうが音節の型が少なくすむようである。しかし、いったいモンゴル語において音節は何を表しているのだろうか。詩は音節数がそろっていてもいいし、第何番めの音節にアクセントがあるというわけでもない。また、ax は axa とも axとも発音されるので同じことばが一音節だったり二音節だったりする。
8. 服部(1951)にならってハルハモンゴル語のモーラ分析を行なうと次のようになる。

a-xa, a-xa-a, a-xa-a-га, a-xa-a-га-a
mo-ri, mo-ri-η,

sa-i-ŋ, sa-i-xa-ŋ,
ja-a-ga-a-da
mo-ŋ-ga-la, mo-ŋ-ga-li-i-ŋ

9. 母音で始まることばにはすべて?が付いていると考えると, $\emptyset \rightarrow /CV_$ だけですむことになる。
10. 接統詞 ba「と」は単独で発音すると baa となるけれども, 通常短かく発音される。たとえば, tsagaŋ sar ba xar nulms
11. 服部式に表記しても, 共に ulasa となるので同じことである。
12. 通時的には VCC# ということばは存在しなくて, VCVC(V) か VCCV# である。これらが仮りに $\overline{VCVC(V)}\#$, $\overline{VCCV}\#$ というピッチをかつて持っていたとすると, 母音脱落の結果, ピッチの下がりめが前へ移動したということになる。

$$\begin{array}{lcl} \overline{VCVC(V)}\# & > & \overline{VCC(V)}\# \\ \overline{VCCV}\# & > & \overline{VCC}\# \end{array}$$

スピードが速いほど(i)型になりやすいことを考えると, 母音が残っているときに(ii)型で脱落すると(i)型になるといえないもない。通時的に $\overline{VCCV}\#$ というピッチボタンがあったとすると, かつてはピッチが音節の切れめで下がっていたことになるけれども, こと裏付けがあるわけではない。

13. 「チベット」は, 現代語の正書法では, тувэд, төвөд, төвд などの綴り方がある。
14. 現代モンゴル語の正書法では, 形動詞 x の前には必ず母音が書かれなければならない。awax と jawax が同じピッチボタンになるのは, このことと無関係ではないように思われる。しかし, guix, gūix も同じボタンになり, さらに ail, uil も同じボタンになりうる事実は, どのように説明されるべきなのかよくわからない。
15. 注2を参照。
16. ごく大まかにいうと, ピッチ単位が2の要素が前にある場合は, 全体で1ピッチアクセント句になり, ピッチ単位が3以上の要素が前にある場合は, 全体で2ピッチアクセント句になる。たとえば,

P P + ……	P P P + ……
adž axui	aadar boroo
uls tör	etseg ex
ard uls	emgeŋ ex
ard tümeg	
adž am'dral	
bagš šaw'	
ix surguul'	
(全体で1ピッチアクセント句)	(全体で2ピッチアクセント句)

17. 「机の上に」を šireenii deer と発音すると, ピッチアクセント句は全体で二つになる。
18. 六回発話の調査の仕方については, 杉藤美代子先生に御教示をいただいた。本当は, カードに一枚ずつ書いたものを, ゆっくりとめくっていったって発音してもらうのであるが, 種々の事情から残念ながら今回はそれができなかった。

参 考 文 献

- Бимбаев, Р. (1913) *Русско-монгольский словарь: Разговорного языка на халхаском наречии*, Троицкосавск.
- Bosson, James E. (1962) *Buriat Reader*, Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, Vol. 8. Mouton & Co., The Hague.
- 萩原正三 (1975) 『新モンゴル語文法書』日本モンゴル協会
- Hangin, John G. (1968) *Basic Course in Mongolian*, Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, Vol. 73, Mouton & Co., The Hague.
- 服部四郎 (1951) 「蒙古語チャハル方言の音韻体系」『言語研究』20
- Martin, Samuel (1961) *Dagur Mongolian, Grammar, Texts, and Lexicon based on the Speech of Peter Onon*, Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, Vol. 4, Mouton & Co., The Hague.
- Надмид, Ж Ц. Жанчивдорж. Б. Рагчаа (1968) *Монгол хэлний зүй: Ариа зүй, зөв сичих дүрт*, БНМАУ Ардын боловсролын хэвлэл, Улаанбаатар.
- 小沢重男 (1963) 『モンゴル語四週間』大学書林
- Poppe, Nikolaus (1951) *Khalkha-Mongolische Grammatik mit Bibliographie, Sprachproben und Glossar* Franz Steiner Verlag GMBH, Wiesbaden.
- Poppe, Nicholas (1960) *Buriat Grammar*, Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, Vol. 2, Mouton & Co., The Hague.
- Ramstedt, G. J. (1902) *Das Schriftmongolische und die Urgamundard phonetisch Verglichen*, Helsinki.
- Sanzheyev G. D. (1973) *The Modern Mongolian Language*, Nauka Publishing House, Moscow.
- Street, John C. (1962) 'Kalmyk Schwa,' Poppe, Nicholas ed. *American Studies in Altaic Linguistics*, Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, Vol. 13, 263-291.
- (1963) *Khalkha Structure*, Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, Vol. 24, Mouton & Co., The Hague.
- Stuart, D. G. (1957) 'The Phonology of the Word in Modern Standard Mongolian,' *Word*, 13, 65-99.
- 竹内幾之助、出村良一 (1957) 『蒙古語四週間』大学書林
- Vietze, Hans-Peter (1976) *Gesprachsbuch Deutsch-Mongolisch*, Veb Verlag Enzyklopädie, Leipzig.
- Владимирцов, Б. Я. (1929) *Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия: Введение и фонетика*, Ленинград.

1981年9月17日